

お律、お京、そしてお町 ——『うらむらさき』論考——

ORITSU, OKYO, and OMACHI
—— A Study of "Uramurasaki"

坂野 晴 和
Harukazu Banno

目 次

- I. はじめに
- II. お律——「二タ心をもつ女子」
- III. お京——お京の「出世」
- IV. お町——「町、もう逢はぬぞ」
- V. おわりに

I. はじめに

「お千代、お力、そして美登利——『にごりえ』論考 (一)(二)」で、叶えられない初恋物語の完成作品として『たけくらべ』を採り上げた。明治年代の青春文学としての金字塔的作品であるとも指摘した。それは内容はもちろんのこと、文体・構成・描写法においても他に追従を許さない一葉独自のものであったからである。が、しかし、一葉にはこれだけでは満足できない「女であることの哀しさ、哀しみ」の問題があり、次に、新たな作品の構築を手がけることになったのである。それがここに採り上げた『裏紫』であり、『わかれ道』であり、『われから』の諸作品である。『裏紫』は好評を博したが、残念ながら、Ⅰのみで未完に終わってしまった。「夫を裏切る女」お律の設定に苦心はしたものの、書き切れなかったのである。だが、『わかれ道』で、お京を妾にし、女の「出世」ととらえはしたが、それでも満足できず、最終作品となった『われから』で、この問題の解決を一挙に図ろうとした。「夫を捨てる女」と「夫に捨てられる女」という二代にわたるお美尾・お町に「女であることの哀しさ」を、彼女の永遠のテーマを、追求しようとしたのである。完成度の高い作品を書いてきた一葉の作品中では、もっとも雑な問題点の多い作品となってしまったが、それは後述のように、彼女の中で十分に描き切るだけのものが出来上がっていなかったためである

う。死の病を押しての就筆活動であったがために、一層の苦衷が偲ばれるのである。

以下の論考で、上記の一作品ずつについて検証してみたい。

II. お律——「ニ夕心」をもつ女子

題名は未定稿に見るように「うらむらさき」であった筈である。印刷に回る段階で漢字表記の「裏紫」になってしまったようである。掛詞として「恨み」が使われているとしたら、当然のことに仮書きの方が、より効果的である。典拠については『詞花和歌集』の「とはぬまをうらむらさきにさくふぢのなにとてまつにかかりそめけむ」*¹などが考えられている。起筆は明治28年12月下旬と考えられる。『大つごもり』（明治27年12月『文学界』）、『たけくらべ』（明治29年1月『文学界』）、『軒もる月』（明治28年4月3・5日『毎日新聞』）、『経づくえ』（明治28年6月『文芸倶楽部再掲』）、『うつせみ』（明治28年8月27日～31日『読売新聞』）、『にごりえ』（明治28年9月『文芸倶楽部』）、『十三夜』（明治28年12月『文芸倶楽部』）、『この子』（明治29年1月『日本乃家庭』）、『わかれ道』（明治29年1月『国民之友』）と、矢継早に、作品を発表し、世間の注目を大いに集めていた頃である。一葉は自身のメインテーマである「女であることの哀さ」を、先ず『たけくらべ』を頂点とする純愛もの・片恋もので追求し、完成をみ、次に『軒もる月』のお袖、『にごりえ』のお力、『十三夜』のお関、『わかれ道』のお京によって、女の性的問題に手をつけたのである。そして本格的に作品としてそれをまとめ上げようとしたのが、この『うらむらさき』であったといつてよい。『軒もる月』の中で、「桜町の名を忘れぬ限り我れはニ夕心の不貞の女子なり。」といわせたお袖の延長線上に、お律を設定し、㊦㊧の内容量で筆を執った筈である。明治29年2月5日発行の『新文壇』第2巻第2号に出来上ったものが掲載された。ただし、それは㊦だけであった。原稿の締切りが毎月20日であったので、1月20日頃までにこれを書き上げたことになる。20日間ほどで構想を練り上げ、㊦を完成し、㊧を具体化しようと努めた。未定稿に残された密会の場所、吉岡との絶交、お律の生い立ち等、興味深いものがあるが、残念ながら、㊧は㊦の一部のみで、書き上げられてはいない。

○…………、仲町の姉が何やら心配の事が有るほどに、此方から行けば宜いのなれど、八かましやの良人が暇といふては毛筋ほども明けさせてくれぬ五月蠅さ。夜分なりと帰りは此方から送らせうほどに、お良人に願ふて鳥渡来て呉れられまいか。待つて居る。と言ふ文面で御座ります。…………

○…………と知らぬ事なれば仏性の旦那どの急ぎ立るに、心の鬼や自づと面ぼてりして、胸には動悸の波たかゝり。

○…………妻は表へ立出でしが大空を見上げてほつと息を吐く時、曇れるやうの面もちいと暮深う成りぬ。何処の姉様からお手紙が来ようぞ、真赤な嘘をと我家の見返られて、…………

○能うも能うも舌三寸にだましつけて心のまゝの不義放埒。これがまあ人の女房の処業であ

らうか。何と言ふ悪者の、人でなしの、法も道理も無茶苦茶の犬畜生の様な心であらう。

○……………何が不足で剣の刃渡りするやうな危ない^{たくみ}斗^ま画をするのやら。……………

○……………「あゝ、私はそのやうな心弱い事に引かれてならうか。最初あの家に嫁入する時から、東二郎どのを良人と定めて行ったのでは無い物を。形は行っても心は決して遣るまいと極めて置いたを、今更に成って何の義理はり。悪人でも、いたづらでも、構ひは無い。お気に入らずばお捨てなされ。捨られれば結句本望。彼のやうな愚物様を良人に奉って吉岡さんを袖にするやうな考へを、何故しばらくでも持ったのであろう。私の命が有る限り、逢ひ通しましよ切れますまい。良人を持たうと奥様お出来なさらうと此約束は破るまいと言ふて置いたを、誰れが何のやうに優しからうと、有難い事を言ふて呉れようと、私の良人は吉岡さんの外にはない物を、最う何事も思ひますまい思ひますまい」……………、胸の動悸のいつしか絶えて、心静かに気の冴えて、色なき唇には冷やかなる笑みさへ浮びぬ。

(傍点筆者)

前掲①の引用部分はすべて話の発端、設定部で、妻のお律が夫を欺いて、密会に出掛けるところを描いた部分である。夫は小松原東二郎、西洋小間物店の主人で、結構人の旦那である。その恋女房がお律で、愛嬌があり、年も若いのに「お伶俐なお内儀さま」と人々が褒める商売上手な若妻である。だが、彼女には、嫁入前に既に心に決めた人があり、「形は行っても心は決してやるまい」という固い決意のもとに小松原家に嫁いだのである。心に決めた相手とは学生の吉岡である。密会の企み、女文字の手紙（呼び出し状）、人の好い夫を欺いて店を出ようとする。店の者への心遣い、外で車を拾うという商家の倣い。いかにも心の行き届いた商家のお内儀さん振り。一方、一旦、家を出てしまうと、その心は大きく揺れ動く。自分のこと、吉岡のこと、夫とのこと。躊躇はするものの、初心に立ち返り、勇を鼓して吉岡の許へと足を向ける。「心静かに気の冴えて、色なき唇には冷やかなる笑みさへ浮びぬ」と、頭で自分の行為を正当化し、夫を裏切る後めたさを冷笑の中に閉じ込め、行動に移るのである。

意気込んで、お律を設定した筈である。若い行動的な女性として描き上げようとしたのである。前述のように、心に秘めたものをもちながら、表面は柔順な小松原家の妻女であり、店を取り仕切る商家の女主である。二面性をもちながら、初志は貫き通すという強い女性、古風なただ夫に従うという女性ではないのである。当然のことに、大好評をもって迎えられた筈である。

未完で終わった意味

以下に先ず未定稿として残った一部を転載する。

Ⅲ

うらむらさき

④

IV

○老女房の私をお前様もしも倦給ふとならば其やうに言ふてのけて下され、思ひ切ませう、思ひ切まするほどに、御遠慮には及びませぬ、唯一こと、いやといふて下され、唯一ことでムんするもの、仰しやりにくもなからう筈、さあ仰しやれ、言ふて下され、とお律膝にこぼるゝ涙をはらひて、拝みまする、唯一言、もう縁切りと仰しやつて下され、よう吉岡さま、私は夫で快う思ひ切ますると、はては身をふるはせて

VIII

甲

○良人といふは名ばかりあれは木偶の坊の牢番、ぬけて来るに子細は御座んせぬ、唯道すがら人に逢ふが五月蠅く車も何か気が咎むれば急ぎ足に来て何うやら息が切れまする、御白湯一つと自ら茶棚かきさがして筒茶わんにぬる湯一口、此ほどは煩ってお出なされましたさうな、学校も定めて休んでゝ御座りましたろ、いつぞや仰しやった新聞社とやらの口は御相談ができましたのか、あれもこれも伺ひたけれど人目が多さに文をも上げがたく、此半月ばかりは夜もろくろくと睡りませぬ、まあ御機嫌はようムりますか、貴君のお子にさへお替りがなくはほんにほんに嬉しうムりますと、目には涙の露みえながら笑くぼを頬にお律のとへば、男は天井を打あふぎ見て、あゝ夫れでも好く来て下された、最う

ここに残された内容は、お律のその後である。だが、殊にIVのそれは、設定部との隔たりの大きさに驚かされる。心の夫である吉岡への縁切りの哀訴である。涙をこぼして相手の出方、「いや」「もう縁切り」と言って欲しいと哀願するのである。設定部の激しい吉岡に対する愛執の情が、ここでは一転してすっかり影を潜め、別れを相手の意志に委ねるのである。『軒もる月』のお袖とは対照的である。お袖は結婚後も言い寄る桜町の殿からの手紙を封も切ることなく、それを読むこともなくすべて炭火の中へ投げ入れてしまうのである。自分の意志で、縁あって嫁いだ夫との生活に身も心も入れていくというのである。

一葉の心意気とは裏腹に、書けば書くほど本意な内容となってしまう。一人の自分の意志を貫き通すような女性は書けないのである。旧来の女性、古い因習に囚われた女性しか書けないのである。「別れ」を相手に言わせ、それにただ従って生きる女となってしまう。お袖は自分の意志で将来を切り開いたのに比べ、お律は相手の意志に自分を委ねるのである。一葉には書いたものの、満足できるものではなかったのであろう。

明治29年2月26日付の鳥海嵩香^{*2}の書簡には「——近作『裏紫』の如きは其陰怪なる着想の中にも最も傑出せる所のものにて一葉女史が集中の佳作の一に数ふるも予は決して失当の見にあらざるを信ずるものなり」と木場精一という匿名の投稿を紹介し、原稿の催促をしている。また明治29年4月にも「あれ程の高作続稿急に御繁忙のため出来かね候由僕呆然としていふ処を得知らず候洵に御多繁の御事は今更貴論を待たずとも毎々愚測致居候儀にてそれ故にこそ豫て御案内の通り5月蠅き程いつもいつも御催促申上げたる訳にて候……………」

……御恵投成し被下度ドウセ今日まで待た事故出来る迄御待申上候」と書簡を送ってきている。

大方の推察どおり、『通俗書簡文』の最終稿、『たけくらべ』の改稿、更には彼女自身の病気がいよいよ『裏紫』の続稿を書く意欲を殺いでしまったようである。

『軒もる月』のお袖

未定稿のDに定稿の『軒もる月』の原形を見ることができるが、そこには「今は昔し某の女塾に木浦妙子のおさなな早くより聞えて学事の勝れたるに品行よければ人の覚えも一倍成し、………」と主人公木浦妙子を紹介し、更には、「身は高林家に一年幾度の出替り、小間使といへば人らしけれど御寵愛には犬猫も御膝をけがす物ぞかし、」と桜町の殿が高林家、高林の若殿とされ殿との関係が書かれている。主人公の名、出自などに行を割いてはいるが、定稿では「卑賤にそだちたる我身なれば始より此以上を見も知らで、世間は裏屋に限れる物と定め、我家のほか天地のなしと思はゞ、はかなき思ひに胸も燃えじを、暫時がほども交りし社会は夢に天上に遊べると同じく、今さらに思ひやるも程とほし、」と、単純化されている。『毎日新聞』への二回に分載、主人公の説明部分を削り、未定稿では書き切れていない主題部を増補し、ここに

○……、女子はあたりを見廻して高く笑ひぬ、其身の影を顧り見て高く笑ひぬ、殿、我良人、我子、これや何者として高く笑ひぬ、目の前に散乱れたる文をあげて、やよ殿、今ぞ別れまいらするなりとて、目元に宿れる露もなく、思ひ切りたる決心の色もなく、微笑の面に手もふるへで、一通二通八九通、残りなく寸断に為し経りて、熾んにもえ立つ炭火の中へ打込みつ打込みつ、からは灰にあとも止めず煙りは空に棚引き消ゆるを、うれしや我執着も残らざりけるよと打眺むれば、月やもりくる軒ばに風のおと清し。

と全体を結んだのである。

お袖は鍛工場の職工を良人として、乳飲み子を持ち、良人のやさしい心遣いのもとに平穏な家庭生活を送ってはいしたが、一方で、かつての主人、桜町の殿が忘れられず、殿もその気持を手紙に託し何通も送ってきたのである。ただ、その手紙は封を切ることなく、葛籠の底、帯揚の中に隠しもっていたのである。だが、自分のために夜遅くまで働く良人の帰りを待つ間、いろいろな妄想に苛まればするが、自分の今後を考え、ついに意を決して、桜町の殿からの手紙をすべて火中に投げ入れ、燃してしまうのである。すべてが煙りとなることによって、「うれしや我執着も残らざりけるよ」という心境に達するのである。

現状を是認して、母として職工の妻として、過去を振り捨てて生きていこうとするのである。犬や猫と同列に桜町の殿との事を考えた過去の自分を打ち捨てて、本来の一個の女性として生きていこうとするのである。そこには女の性の哀しさ、内面の葛藤を乗り越えていくお袖の姿が生き生きと描かれているのである。掲載の紙面を配慮しての作品づくりではあったであろうが、次につながる新たなものを書こうとしたその意欲は十分に感じとられるので

ある。

○廿日残花君^{*3}にはるみなわ集一冊これ見よとて也 なほ毎日新聞が日曜付録にものせよとたのまる 稿をば二十六日までにといふ 文学界のかたもせまれるをこは」いとあわただし

上は『しのぶくさ』の明治28年1月の記事である。一葉は『たけくらべ』の続き原稿と、一方で、これも依頼をうけ書き上げたのである。成稿は3月末頃で、掲載は明治28年4月3・5日の両日、『毎日新聞』紙上である。

Ⅲ. お京——お京の「出世」

『わかれ道』考

一葉の作品の題名は、和歌的世界のものが一般であるが、『この子』と『わかれ道』の二作品は、そういった点では例外である。きわめて直載な命名といってよい。後者は和歌の世界からとれば、当然のことに、貫之の古今集の歌「いによる物ならなくにわかれぢの心ほそくもおもほゆる哉」などの『わかれぢ』がそれであろう。あえて口語・現代語で『わかれ道』としたのには何か特別な理由がある筈である。例えば考えられるものとしては、時流に合わせ、時代を切り開こうとする掲載誌の性格を考えて、「わかれ道」としたのではないだろうか、ということである。初出は『国民之友』第277号（明29・1・4民友社）の付録「藻塩草」である。明治28年12月20日、「拜啓 其後如何ニ候哉 此間参堂御邪魔 致し候 心配致し居候 実申せば此28日頃迄ニ来年4月発売の物迄 編輯致し置く事ニ候へば 是非22日頃迄に御送り被下様願上候」と国木田収二^{*4}からの督促の書簡があり、更に「編輯時日相迫り候間可成至急御校正被下度願上候」という校正の督促状も明治28年12月24日付で送付されてきている。ここから推察すれば12月の11・12日頃には脱稿した筈である。未定稿A・Bには、定稿への過程が示されているが、傘屋の吉蔵の年齢が16歳、17歳と揺れ、彼を傘屋に雇い入れたのが、傘屋の老婆ではなく、大腹の小室屋佐吉だともある。定稿とは違った設定である。更にお京の出自にも触れ、「私も両刀たばさんだ者の娘だ」とあり、お京自体も「京屋のおせんといふ糸やの娘の容貌よし」と書かれている。また未定稿には珍しくまだ題名もつけられてはいない。未定稿Bを骨子として現行の定稿が書き上げられ、その段階で内容を統一し、更にはBの部分削除がなされ、『別れ道』という表題が付けられたものようである。

次に同時代の森鷗外が『めさまし草』第1号（明29・1・31）に書いた批評を参考までに引用する。

一寸法師と綽名せらるゝ傘屋の吉三といふ小僧あり。もと角兵衛獅子の子供なりしを、今は亡くなりし傘屋の婆が拾ひて育てしなり。性質すなほにて善く働けども、人々嘲りて齒せず。唯裏屋ずまひにて、縫物に口を糊するお京といふ美人のみは、あはれがりて交際ひ

ぬ。お京が貴人の妾にならんとするとき、吉三諫れども甲斐なし。作者樋口一葉氏は処女にめづらしき閱歴と観察とを有する人と覚ゆ。筆路は暢達人に超えたり。

「処女にめづらしき閱歴と観察とを有する人」という評には女流、女性に対する当代の眼が気になるものの、全体としてはこの作品に対する讃辞であることには変わりない。鷗外も賞讃する出来ばえであったのである。

一寸法師とお京

- …………一寸法師と仇名のある町内の暴れ者、傘屋の吉とて持て余しの小僧なり、年は16なれども不^ふ凶^と見る処は1か2か、……………何にも背の低ければ人嘲りて仇名はつけゝる。…………
- …………、お京さん母親も親父も空っきり当が無いのだよ、親なしで産れて来る子があらうか、己れは何うしても不思議でならない、
- …………生れると直さま橋の袂の貸赤子に出されたのだなどゝ朋輩の奴等が悪口をいふが、もしかすると左様かも知れない、夫れなら己れは乞食の子だ、母親も親父も乞食かも知れない、
- …………今の傘屋に奉公する前は矢張己れは角兵衛の獅子を冠って歩いたのだからと打しをれて、お京さん己れが本当に乞食の子ならお前は今までのやうに可愛がっては呉れないだらうか、振向いて見ては呉れまいねと言ふに、
- 今は亡せたる傘屋の先代に太っ腹のお松とて一代に身上をあげたる、女相撲のやうな老婆さま有りき、六年前の冬の事寺参りの帰りに角兵衛の子供を拾ふて来て、…………
- 恩ある人は二年目に亡せて今の主も内儀様も息子の半次も気に喰はぬ者のみなれど、此処を死場と定めたるなれば厭やとて更に何方に行くべき、
- …………四季押とほし油びかりする目くら縞の筒袖を振って火の玉の様な子だと町内に^{こわ}怕がられる乱暴も…………
- 以上が吉三の説明部であるが、自分の出自も分からない淋しがりやで、一人、姉とも頼むお京さんに心を許し、弟のように可愛がられる。一方のお京は、
- …………仕立かけの縫物に針どめして立つは年頃二十余りの意気な女、多い髪の毛を忙がしい折からとて結び髪にして、少し長めな八丈の前だれ、お召の台なしな半天を着て、
- …………、お前さんなぞは以前が立派な人だと言ふから今に上等の運が馬車に乗って迎ひに来やすのさ、だけれどもお妾に成ると言ふ謎では無いぜ、
- 仕事屋のお京、今年の春より此裏へと越して来し者なれど物事に気才の利きて長屋中への交際もよく、大屋なれば傘屋の者へは殊更に愛想を見せ、小僧さん達着る物のほころびでも切れたなら私の家へ持ってお出、…………、私は此様ながらがらした気なれば吉ちゃんの様な暴れ様が大好き、
- 十二月三十日の夜、…………。…………、とんでもない親類へ行くやうな身に成ったのさ、私は明日あの裏の移転をするよ、余りだしぬけだから囁お前おどろくだらうね、私も少し不

意なのでまだ本当とも思はれない、兎も角喜んでお呉れ悪い事では無いからと言ふに、お京はたまたま傘屋の長屋に引越して来た、仕事屋で生計を立てる美人の独り者である。姉御肌で、一人爪弾きされている吉三の面倒をみてやるのである。暴れ者ではあっても肉親の情に飢えていた吉三には恰好の姉といった存在になったのである。二人ともに両親のいない淋しい存在であり、仕事はそれぞれに熟達してはいるものの、前途に確たるものがないという共通点をもっているのである。そこから一方は姉のように面倒をみてやり、一方は可愛がられ、弟のようにそれに応え、振舞うのである。だが、この二人の関係は長くは続かなかった。お京は女として将来を見据える中から、当然のことに二人の関係は破綻をきたすことになるのである。純心で一本気な吉三にはお京の気持が理解できない、許せないものであったからである。

お京の決心

○……………仕事やお京さんは八百屋横町に按摩をして居る伯父さんが口入れで何処のかお邸へ御奉公に出るのださうだ、何お小間使ひといふ年ではなし、奥さまのお側やお縫物師の訳は無い、三つ輪に結って総の下った被布を着るお妾さまに相違は無い、何うして彼の顔で仕事やが通せる物かと……………

○……………夫れでも吉ちゃん私は洗ひ張に倦きが来て、最うお妾でも何でも宜い、何うで此様な詰らないづくめだから、寧ろその腐れ縮緬着物で世を過ぐさうと思ふのさ。

未定稿AのIVに「京屋のおせんといふ糸やの娘の容貌よしが見かけて、吉ちゃん今日は洪を買ひにお出なさるのかえ、帰りに寄っておしるこを上がらぬか、……………」とあり、未定稿BのIIに、「もう洗ひはり仕立物に倦はてたもの、お前私がかんな事をして居るを幾年に成るとお思ひだ、十四のとしに父親が死んで以来、のべつに人の台所から這入って、御世辞の安うりをして、馬鹿にされて、」、更にIVには、「私も両刀たばさんだ者の娘だ、たゞ人の手遊にはならない、今に今に相応のはたらきをして見せるからね、何うぞそれまで私の事をつまらない女と捨てずに居ておくれ」などと書かれている。この下書きの中にも、お京の「お妾奉公」への決意がどこにあったのかが明確に書かれている。年齢と将来性、仕事屋の実状、武士の娘としての矜持、容貌よし。これらが新しい生活を決意させたのである。十一・二としか見えない十六歳の乱暴者、一本気で、純心な若者には、お京の心が読めないのである。一時にせよ、姉とも頼ったお京が、正式の結婚ではなく妾奉公に出るのが許せないのである。自分との関係もこれで全て切れてしまうと単純に思い込んでいるのである。今までとは当然、違うものにはなるものの、お京は吉三を弟として面倒を見てやろうと思っているのに、それをも拒否してしまうのである。吉三にはお妾自体が「腸の腐った」人になるもので、「お前は不人情」で「嘘つ吐きの、ごまかしの、慾の深い」女だというのである。

○あれ吉ちゃんそれはお前勘違ひだ、何も私が此処を離れるとてお前を見捨てる事はしない、私は本当に兄弟とばかり思ふのだもの其様な愛想づかしは酷からう、と後から羽がひじめ

に抱き止めて、気の早い子だねとお京の諭せば、そんならお妾に行くを廃めにしなされるのかと振りかへられて、誰れも願ふて行く処では無いけれど、私は何うしても斯うと決心して居るのだから夫れは折角だけれど聞かれないよと言ふに、吉は涙の目に見つめて、お京さん後生だから此肩の手を放してお呉んなさい。

悪態をついて、草履下駄を足に引かけて、外に出ようとする吉三を、お京は羽交締にして自分の気持を再度伝えようとしたが、駄目であった。分かってもらおうと手に力が入ってどうしようもなかったのである。一方、吉三にはやはりお京のことは納得できないものの、あきらめて泣きながら、お京に「後生だから此肩の手を放してお呉んなさい。」というのが精一杯であったというのである。

一葉自身は、日記・書簡に見られるように、天啓顕真術会の久佐賀義孝に金銭面での援助を請うため、初め偽名で訪問し、援助を依頼したことがあり、その後、本名でのつき合いもあったのである。

明治27年6月9日付の久佐賀からの書簡には「……………勿論貴女の御決心は他にあらず如斯貴女の身上を小生が引受くるからに貴女の身体は小生に御任せ被下積りなるや否やの点なり右は甚だ慮外の申分なれども実は余り貴女の御困難を察し過ぎし是迄折角の目的を今や廃止せられんとする危急の場合なれば普通の良心に問ふの違なく斯くは意外の色眼に迷ひ貴意を伺う次第なれば御咎めなく宜敷御返事あるを待つ 夏子様」とあり、日記「水の上日記」にはその時の気持が次のようにも記されている。

○九日成けん 久佐賀より書状来る 君が歌道熱心の為にしか困苦せさせ給ふさまの我一身にもくらべられていと憐なればその成業の暁までの事ハ我れに於ていかにも為して引受べし され共唯一面の識のミにてかゝる事をたのまれぬともたのミたりともいふは君にしても心ぐるしかるべきにいでやその一身をこゝもとにゆだね給はらずやと厭ふべき文の来たりぬ」そもやかものしれ物わが本性をいかに見けるにかあらん 世のくだれるをなげきてこゝに一道の光をおこさんところざす我れにして唯目の前の苦をのがるゝが為に婦女の身として尤も尊ぶべきこの操をいかにして破らんや あはれ笑ふにたえたるしれ」ものかなさもあらばあれかれも一派の投機師なり 一言一語を解さざる人にもあらじとてかへしをしたゝむ」(明治27年6月9日) (傍点筆者)

一葉自身は、この久佐賀からの提案、金銭の援助の代償としての妾生活を拒否している。「婦女の身として尤も尊ぶべきこの操をいかにして破らんや」と書いているのである。この考えは吉三にそのまま活かされてはいるが、お京にはあえて自身の考えとは反対の行動をとらさせるのである。作者が女の身として、大切にしてきたものをあえてここでお京を通して破り、新たな展開の一つとして描いたのが、この『わかれ道』なのである。女の一つの生き方を意に反してまでも挑戦し、書いてみたのである。

IV. お町——「町、もう逢はぬぞ」

『われから』考

『太陽』第2巻第12号(明治29年6月5日)に載った高山樗牛の「一葉女史の『われから』評」を引用してみる。

○文芸倶楽部の第6編は又もや一葉女史が『われから』と題する一佳篇を掲げぬ。女史がけふこのごろは殆ど吾等をして、加ふべき賛辞の選択に倦むことを覚えざらしめむとす。

おのづからとは云ひながら、扱ても見事なる女性の観察は、鬚眉作家のなかなか及び難きものありて存す。お美尾のことに就きては、巧みに筆を省かれたれども、ありしにも増して明かに思ひ遣らるゝは、ただの腕にはあらず。上野わたり浮世の栄華を思ひ染めて、見る影も無き身に較べては、ありし我にもあらず心狂ひて与四郎との中、是より永く隔たりし。はては出処あやしき二十円の金を名残に、其子までを置き去りて跡無く消えしお美尾は、二十年の後に、派手作りにはたち下とも見ゆる奥様となりて顕はれぬ。

そもや『お前、母の性を受けつぎて、高品にきゃしゃ骨細の生れつき。家つきを冠りの気儘、よろづ派手好みに、下々の思ひやり厚く、情多く、嫉妬深く、気の軽き割りには心細く、憂しと思ひつめては一日一夜泣きつづけもし兼ねまじく、エゝまゝよとやけの上にては何事にてても為兼まじき』神経質の女性は、お美尾のありし昔にくらべて親子の縁浅からず、筆の跡床しうたどられぬ。『旦那様の身持ちは那程までに吾を袖にし給へども女の身の悲しさは、あけて夫れとも怨じ難ね、思ひ思ひてつらやつらやの果は、心にも無きあさましの挙動ひ、家つきとて許されず、浮世の外にわれから身を捨つる』お町の末路。吾等は読み終りて女子の身の憐れに悲しう涙こぼれぬ。

吾等は一葉女史が筆の痕に、お町の身の上に十分の同情を認め得たるを多とす。お美尾とお町、与四郎と恭助、是の間の因縁を冥想すれば、一部の世情歴々として鏡にかけて見るが如し。書生千葉がお町に対する隠然たる依戀の情は、下婢の間話の中にほの見えて、頼り少き天が下に、我一人の奥様の間に、一路の情糸を遊ばしめたる作者の手際など、にくらしき程床しや。

会話の調子の品能くて実らしく、他の文との繋ぎの穩かに角目だたぬ、さては円転滑脱、痒き所に手のとどくフレキシブルの書振、此等は一葉女史が独得の長所なり。殊に女性の談話には一種云ふべからざる同情を湛ふるあたり、殆ど天品の筆とも謂つべくや。(以下略)

同時代評としてのあえて高山樗牛のものを引用したが、いささか誉め過ぎである。『たけくらべ』によって名声を博し、一躍、女流作家としての地歩を固めはしたが、この作品には欠点・問題点が少なくない。二、三列举してみると、

1. 話に飛躍があり過ぎること。——お美尾の失踪と二十円の金の出所、お美尾とお町のつながり。

2. 省筆が多いこと。——お町の父親のこと。お美尾の母親の変心。千葉への処遇とお町。これらは物語の展開上、ただの省筆とはいえない部分であり、作品としての完成度という点では完成度の低いものと言わざるを得ない。一葉は、それぞれの作品を書き上げるのに、何度も何度も推敲に推敲を重ねて作品を完成してきたのに、残念な出来と言わざるを得ない。彼女の作品の中で、今に残る未定稿原稿の多さ、定稿の約3倍ものそれがあり、その苦心のあとが伺われはするが、それだけにやはり気になるところである。下書きを繰り返し、それを成稿にまとめ上げる段階で、当然のことに気のつく筈のものであるのに、それをあえて定稿にしたというのは、やはり気になるところである。新しい女、これまで書こうとして書くことのできなかった女性の一つの生き方に目を奪われ、物語の展開を急いだ結果ではないだろうか。更には自身の病気の進行とも関係があるのではないだろうか。

入れ子型の物語構造^{※5}、時を現在から始めて、過去に逆上り、再度、現在に戻して終わるという、一葉のこれまでとは違った手法によって、お美尾・お町の二人の女性の物語を完成しようとした。当初、『たけくらべ』よりも長い作品を考えての、構成手法ではなかったかと考えられるが、残念なことに、やはり、「夫を捨てる女」お美尾の描写には、『うらむらさき』のお律同様、いな、それ以上に十分な描写ができず、ただ行動的な女性の一面のみが描かれ、意味不分明、説明不足で、話に飛躍の多い作品となってしまったといつてよいのではないだろうか。

前記、橋牛の評の中に「鬚眉作家のなかなか及び難きものありて存す。」と、男性作家を「鬚眉作家」と表現したところがある。女流作家に対応することばで、一葉を誉めるのに当代の男性作家のあり様を戒めるのに使っている。今では死語となったが、一葉の時代にはあったことばとして、あえてこの部分をも引用した。

『われから』ではその前半部で男を捨てる女、お美尾を書き、後半部では男に捨てられる女、お町を書いた。対照的な二人の女の生き様を書いたことになる。捨てられる女、お町には、最後に、「我れをば捨て、御覧ぜよ、一念が御座りまするとて、はたと白睨む」と、女の心意気・執念を描出して終っているのが一葉らしい終筆といつてよい。

むかし、男、人しれぬ物思ひけり。つれなき人のもとに、
恋ひわびぬ海人の刈る藻に宿るてふ
われから身をもくだきつるかな

——『伊勢物語』第57段——

題名の典拠と考えられる『伊勢物語』の一段であるが、この男の、身の破滅を女性に置き替えて、この作品は成り立っているのである。主人公お町の生き様の中に、一葉の考える、時代に生きる女の姿を描き出したのである。

発表は明治29年5月10日発行の『文芸倶楽部』第2巻第6編の中である。そのため、4月には脱稿したものと考えられている。明治29年の1月から4月まで、一葉は精力的に就筆活

動に励んだことなる。『大つごもり』、『裏紫（上）』、『たけくらべ』（再掲本）、更には、『通俗書簡文』と忙しい日々を送ったことになる^{**6}。当然のことに、自病と進行中の肺結核とも闘って書いていたのである。

お美尾——夫を捨てる女

- 年をいはず二十六、遅れ咲の花も梢にしほむ頃なれど、扮装おつくりのよきと天然の美しきと二つ合せて五つほどは若う見られぬ徳の性、お子様なき故と髪結の留は言ひしが、あらばいさゝか沈着くべし、いまだに娘の心が失せて、……………
- 此人始めは大蔵省に月俸八円頂戴して、兀はげちよろけの洋服に毛縞子の洋傘さしかざし、大雨の折にも車の贅はやられぬ身成しを、一念発起して帽子も靴も取って捨て、今川橋の際に夜明しの蕎麦搔きを売り初し頃の勢ひは千鈞の重きを提げて大海をも跳り越えつべく、知る限りの人舌を巻いて驚くもあれば……………、……………、幼馴染の妻に美尾といふ身がらに合せて高品かうひんに美しくしき其とし十七ばかり成しを天にも地にも二つなき物と捧げ持ちて、……………
- ……………、美尾はいかに感じてか、茫然と立ちて眺め入りし風情、うすら淋しき様に物おもはしげにて、……………、我れと我が身を打ながめ唯悄然としてあるに与四郎心ならず、何うかしたかと気遣ひて問へば、……………
- ……………、実家の迎ひとて金紋の車の来し頃よりの事、お美尾は兎角に物おもひ静まりて、深くは良人を諫めもせず、うつうつと日を送って実家への足いとゞう近く、帰れば襟に腮を埋めてしのびやかに吐息をつく、……………
- ……………従三位の軍人様の、西の京に御栄転の事ありて、お邸彼方へ建築られしを幸ひ、开処の女中頭として勤めは生涯のつもり、老らくをも養ふて給はるべき約束さだまりたれば、最う此地には居ませぬ、……………
- ……………、御新造は今日の昼前、通りまで買い物に行つて来ます、帰りまで此子の世話を頼みと仰しゃって、……………
- ……………、いつも小遣ひの入れ場処なる鏡台の引出しを明けて見るに、これは何とせし事ぞ手の切れるやうな新紙幣あたらしきをばかり、其数およそ二十も重ねて上に一通、与四郎は見より仰天の思ひに成りて、……………、其文開けば唯一ト言、美尾は死にたる物に御座候、行衛をお求め下さるまじく、此金は町に乳の粉をとの願ひに御座候。

『われから』の前半部、(三)から(七)までが、お美尾の話である。夫を捨てる女の話である。作者は『うらむらさき』で書きたかった女の一面を、幼馴染の金村の奥様という設定で、真面目で妻思いではあるが金には大して執着のない平凡な大蔵省の役人を夫にもつ女の生活を描くことによってまとめ上げた。美尾の変心の端緒となる里、実家から迎えの車の描写が唐突で、意味不明である。説明不足といってよい。母親の今の二人の生活に対する不満が大きな要因であったことは分かるが、余りにも突然の呼び出し、外出である。その上、最後には子どもまで残して、出所の分からない二十円という大金を置いて、家出をするので

ある。先を急ぎ過ぎたのか少し話に無理がある。

○與四郎は忽ち顔の色青く赤く、唇を震はせて悪婆、と叫びしが、怒気心頭に起って、身よりは黒烟り立つ如く、紙幣も文も寸断寸断に裂いて捨て、直然と立ちしさま人見なば如何なりけん。

(七)の結びで、作者は与四郎の心中を前記のように書き、いよいよ金の亡者となって再起を図る与四郎を読者に想像させるのである。

お町——夫に捨てられる女

○……奥方の町子おのづから寵愛の手の平に乗って、強ち良人を侮るとなけれども、……

○此御中に何とてお子の無き、相添ひて十年余り、夢にも左様の気色はなくて、清水堂のお木偶さま幾度空しき願ひに成けん、旦那さま淋しき余りに貰ひ子せばやと仰しやるなれども、……

○書生の千葉……、飛白の綿入れ羽織ときの中に仕立させ、彼の明る夜は着せ給ふに、千葉は御恩のあたゝかく、……おゝ可愛い男と奥様御鼻屑の増りて、お心づけのほど今までよりはいとゞしう成りぬ。

○奥さまは例に似合ず沈みに沈んで私は貴君に捨てられは為ぬかと存じまして、夫れで此様に淋しう思ひますと、……

○今歳も今日十二月十五日、……、奥様は暫時のほど二階の小間に気づかれを休め給ふ、血の道のつよき人なれば胸ぐるしさ堪えがたうて、枕に小抱巻仮初にふし給ひしを、小間づかいの米よりほか、絶えて知る者あらざりき。

○一方は仲働の福のこゑ、……、相手は茂助がもとの安五郎がこゑなり、……、飯田町のお波が事を知ってかと問ひかけるに、……、色の浅黒い面長で、品が好いといふでは無いか、お前は親方の代りにお供を申すこともある、拜んだ事が有るかと問へば、見た段か格子戸に鈴の音がすると坊ちゃんが先立で駆け出して来る、続いて頭はれるが例物さ、髪の毛自慢の櫛巻で、薄化粧のあっさり物、半襟つきの前だれ掛とくだけて、おや貴郎と言ふだらうでは無いか、すると此処のがでれりと御座って、久しう無沙汰をした、免るせ、……

○さまざま物をおもひ給へば、奥様時々お癪の起る癖つきて、はげしき時は仰向けに仆れて、今にも絶え入るばかりの苦しき、初は皮下注射など医者の手をも待ちけれど、日毎夜毎に度かさなれば、力ある手につよく押へて、一時を兎角まぎらはす事なり、男ならでは甲斐のなきに、其事あれば夜といはず夜中と言はず、やがて千葉をば呼立てゝ反かへる背を押へさするに、……

○……、谷中に知人の家を買ひて、調度万端おさめさせ、此処へと思ふに、……、今はと思ひ断ちて四月のはじめつ方、浮世は花に春の雨ふる夜、別居の旨をいひ渡しぬ。

○かねてぞ千葉は放たれぬ。

○…………、私を浮世の捨て物になさりますお気か、私は一人もの、世には助くる人も無し、此小さき身すて給ふに仔細はあるまじ、美事すて、此家を君の物にし給ふお気か、取りて見給へ、我れをば捨て、御覧ぜよ、一念が御座りますとて、はたと白睨むを、突のけてあとも見ず、町、もう逢はぬぞ。

『われから』の後半部、(一)(二)を承けての(八)から(十三)までの主人公がこの「お町」であり、作者は、捨てられる女性を描いたのである。父親の莫大な遺産の下、贅養子と仲睦じく楽しい生活を送ったが、結婚して十年余、子どもができない、という女性である。

未定稿の多さは先にも触れたが、この「お町」の部分がその大半で、未定稿U・未定稿V・未定稿Wに、作品の骨子がすべて含まれている。瀧沢今朝四郎、金村与四郎、瀧沢与四郎と父親の名も三通り、その月給も七円、八円、十円とそれぞれに異ってはいるが。

「捨てられる女」は、先の「捨てる女」と比べて、さほど当時としては特殊、異例のものではなかった筈である。それを作者は多くの紙数を費してまで苦心して書いたのはなぜだったろうか。捨てられる原因が、直接的には書生千葉との不倫の噂話であり、その出所も女中、中働きの福の着物の恨みから出たもので、これがおしゃべりの女髪結の留の口から、次々と話に尾ひれがついて拡がり、主人恭助の耳に入ったからである。福は、「女房をだまらかして妾の処へ注ぎ込む様な不人情は仕度でも出来ない、あれ丈腹の太い豪いでは有らうか、考へると此処の旦那も鬼の性さ、二代つゞきて彌々根が張らう」と語った車夫安五郎の話に相槌をうち、男の妾囲いを甲斐性として認める女性であった。とはいえ、女の恨みの怖さをまざまざと見せつけた。更に言えば、「我れをば捨て、御覧ぜよ、一念が御座ります」というお町の最後のことばが、『われから』の結びとして活きているのである。

主題については『全集第2巻』の補注に書かれた「幸福とは何であろうか」との問いかけにあるといってもよいのではないだろうか。

更には、関礼子氏の『語る女たちの時代』の「物語としての『われから』——『われから』の最後の一節を引用してこの稿を閉じたい。

しかし明治二十年代末期を生きたひとりの女性表現者に「姦通」のテーマを形象化させる力がなかったからといって責めるのは的はずれであろう。本文形成に至る膨大な草稿群の存在は何よりも物語の論理と自己の固有のテーマとの間になんとか接点を見出そうとした悪戦苦闘の跡を証明している。一葉は同時代の多くの評者がごく自然に類推した近松の不義物語の系譜に身を寄せることで日本の十九世紀末を生き、孤立する女性の侵犯のドラマを描いてみせたのである。

V. おわりに

『たけくらべ』が、完璧な小説であるといわれ、日本近代文学のなかで傑作といわれているのは、小説的な真実だからである。——「樋口一葉の文学」和田芳恵（『国文学十二

月臨時増刊』学燈社 1965)

和田氏の指摘する小説的眞実を、一葉はその初めから最後まで執拗に追求し続け、自己の体験を素材としてテーマである「女の哀しさ」を描き続けたのである。ここでは初恋物語から脱皮して、いよいよ、一人の女として生きる女性たちを主人公としたのである。だが、残念なことに時代の先駆けとはなりえたものの、作品としては未成熟なものとなってしまった。明治中葉を生きた一葉には、相馬御風氏のいう「彼は旧い日本の女として、行き得る限りまで行き、思ひ得る限りまで思ひ詰め、訴へ得る限りまで訴へ尽した女」「一葉はやはり旧い日本の最後の女であった。彼は又最後の江戸の女であった。」(「樋口一葉論」『早稲田文学』明治43.1)ということになる。後に続く、与謝野晶子、平塚雷鳥などには大きな礎とは成り得たものの。

なお、本論考の原文等の引用はすべて筑摩書房刊(1974.3~1994.6)、塩田良平・和田芳恵、樋口悦各氏編纂になる『樋口一葉全集』によるものである。

注

※1 詞花和歌集第8恋下257

ひさしくおとせぬをとこにつかはしける

俊子内親王大進

とはぬまをうらむらさきにさくぶじのなにとてまつにかかりそめけむ

※2 『小文学』『新文壇』発行の文学館編輯員。

※3 戸川残花『文学界』同人。『毎日新聞』客員。

※4 国木田収二(北斗)『国民之友』編輯員。のち、『神戸新聞』『読売新聞』の主筆。

※5 関弘子(1997)『語る女たちの時代——一葉と明治女性表現』新曜社 p314

※6 『全集』第2巻補注 p307

参考文献(順不同)

- 1) 平田由美(1999)『女性表現の明治史—樋口一葉以前—』岩波書店
- 2) 和田芳恵(1972)『樋口一葉集』明治文学全集30 筑摩書房
- 3) 塩田良平・和田芳恵・樋口悦 編纂(1974 1976 1978 1981 1984)
『樋口一葉全集』第1巻・第2巻・第3巻上・第3巻下・第4巻上・第4巻下 筑摩書房
- 4) 樋口一葉(1979)『大つごもり 十三夜 他五編』岩波文庫 岩波書店
- 5) 野口 碩編(1998)『樋口一葉来簡集』筑摩書房
- 6) 円地文子 田中澄江訳(1981)『樋口一葉 たけくらべ にごりえ』明治の古典3 学習研究社
- 7) 樋口一葉(1986)『ザ・一葉——樋口一葉』第三書館
- 8) 岡田八千代校注(1968)『たけくらべ にごりえ』角川文庫 角川書店
- 9) 関礼子(1997)『語る女たちの時代——一葉と明治女性表現——』新曜社
- 10) 菅 聡子(1999)『時代と女と樋口一葉』日本放送出版協会
- 11) 中川 清編(1994)『明治東京下層生活誌』岩波文庫 岩波書店

- 12) 堀場清子編 (1991) 『『青鞥』女性開放論集』岩波文庫 岩波書店
- 13) 横山源之助 (1949) 『日本の下層社会』岩波文庫 岩波書店
- 14) 長谷川晴雨著 杉本苑子編 (1985) 『近代美人伝 (上)』岩波文庫 岩波書店
- 15) 地域雑誌 (1992) 『谷中・根津・千駄木 33』谷根千工房
- 16) 新・フェミニズム批評の会 (1995) 『樋口一葉を読みなおす』学芸書林
- 17) ジョジョ企画 (1999) 『女たちの20世紀・100人—姉妹たちよ—』集英社